

本地図を見せながら、日本には北海道、東北、関東、中部、近畿、中国、四国、九州の地方があることから学習を始めました。「日本に中国があるの?」と不思議そうな顔をしていました。次に、栃木県の周囲である関東地方から、徐々に日本全国へと県名を教えていきました。しかし、闇雲に暗記させようとしても難しいので、「成田空港がある千葉県」等と施設や特産物と併せて話題に出すと記憶に残るようです。次の段階として覚えた都道府県名を漢字で書けるようにさせたいと取り組んでいるところです。

また、6年生に今年度の10月に中華人民共和国（以下中国）吉林省通化県から日本で暮らす両親の元に来日し、同時に編入学した児童がいます。中国の小学校を卒業してからの来日ですが、日本の中学校進学前に少しでも日本語を覚えられればと通級指導をしています。しかし中国語対応の通訳さんもおらず、学力は十分ある様子ですが日本語が分からないために授業の内容が理解できない状態にあります。そこで、本学の学生ボランティア派遣事業のお世話になっています。この児童にとって本校において誰とも満足に話せない中で、母国語で指導し

てもらえる事業にはっとしていることと思います。

そして、最近の外国人児童生徒教育で問題とされている「特別支援教育との関連」が本校でも話題に上がっています。詳細に記すことはできませんが、数名の児童が入級に向けて保護者と話を進めているところです。日本語教室への通級だけではどうしても解決できない状況にある場合、学級担任や特別支援コーディネーターと連携して保護者と話し合い、その児童にとってよりよい教育環境を提供してあげることが必要であると認識しています。

以上、18名の通級児童のうち3名についてと、特別支援教育についての事例を記してきました。そして通級指導の内容ですが、ほとんどの児童に対して主に自学級の教科補習を行っています。日常会話はできるが、基礎学力が十分についていない状態で教科補習を進めるのは確かに難しい場合もあります。しかし、先にも記しましたができるだけ早い「学習で使う日本語の習得」を目指したいと考えています。また、3名を含め通級する児童はいつも目をきらきら輝かせて日本語教室に来てくれます。この素敵な瞳のために、これからも共に歩んでいきたいと思っています。

## 多言語進学ガイダンスに思う



国際学部客員准教授

若林 秀樹

多言語による進学ガイダンスは、HANDSの代表的行事の一つです。プロジェクト発足の平成22年度から始まり、9年目を迎えました。こ

れまで、宇都宮市、真岡市、栃木市、そして大田原市（那須地区）など開催、今年度は以下の3回が行われました。

	ガイダンス名称	開催団体等	期日	参加数	対応言語
1	栃木県高校進学フェア	下野新聞社と共催	9/17	10人	英語、中国語、ポルトガル語、フィリピン語
2	栃木市多言語による進学ガイダンス	栃木市教委と共催	10/13	17人	スペイン語、フィリピン語、ウルドゥ語
3	HANDS多言語による進学ガイダンス	HANDS主催	10/20	12人	中国語、フィリピン語、スペイン語、ポルトガル語

また、佐野市では、教育委員会が主催して毎年開催され、6月に開催されたガイダンスには、計24人（対応言語：英語、中国語、フィリピン語、

タイ語、ネパール語、ミャンマー語）が参加しました。

多言語による進学ガイダンスでは、1) 日本の学校制度、2) 公立校と私立校の違い、3) 学費に関すること、4) 地域の高校、5) 入試までの流れ、など母語を用いて説明するほか、先輩の体験談を聞いて参加者の意識を高めたりしています。また、受入れ側である高等学校の教員がブースを開設、その場で進学相談ができるガイダンスもあります。

最近の傾向として、参加者の多言語化があげられます。HANDS 発足時はポルトガル語やスペイン語など、南米系の言語が多くを占めていましたが、近年はフィリピン語やウルドゥ語、ネパール語など、アジア圏の言語が目立ちます。今年度の佐野市ガイダンスでは、南米系言語対応が見られなかったことからその変化が伺えます。

今年度特筆すべきは、下野新聞社主催高校進学フェアでの開催が実現したことです。一般の受験生や保護者が来訪する会場で、多言語による進学ガイダンスも行われたことは、外国につながる子どもの高校進学が、“特別”ではなく、“ふつう”になってきたことを意味しています。今年度は宇都宮市のフェア会場だけでしたが、来年度は栃木市会場でも開催が決定していますので、支援がより広がることを期待しています。

ガイダンス主催団体による交流会も毎年おこなわれています。昨年度は宇都宮大学で開催され、



北は福島県から南は静岡県の関係者が集まりました。情報交換のほか法的研修など、毎年多くを学ぶことができます。最近では、高校入学後の支援についての議論が目立ちます。高校に入ればいいのではなく、子どものキャリアを長い目で考える方向になったことも、外国につながる子どもの教育が身近になったことの表れです。

一方、ガイダンスが開催されない地域に、必要な情報が届いているのか気になります。交流会はこれまで培ったスキルを、ガイダンスのない地域に広く発信する責務も追っていて、それは現在のICT技術を活用すれば難しいことではありません。今から10年前、栃木県の外国につながる子どもの教育は“白地図”状態でした。そこに色とりどりの足跡を残したHANDSなら、この新たな情報発信を担うことができるのではとないかと考えています。

(以上)

## Sさんとの出会いと支援の難しさ

Sさんの支援を始めたのは10月に行われた栃木県進学ガイダンスの後からです。そのため私達は11月から週に2回、中学校に赴いて入試対策として取り出し授業を行い、主に面接と作文指導を行いました。日本語が殆ど分からない彼女がこのまま約4ヶ月後に日本の高校入試に合

国際学部2年 北川 瑛・齊田 雛

格することはとても難しいことです。

面接では日本語のレベルが低かった事から日本語の会話から教えようと考えました。しかしその際普通の会話を通して教えるべきなのか、それとも文法をベースに教えていくべきなのかとても悩みましたが、実際には日常生活のおか